

「静物」の味覚と個人の誕生の物語

見る者の触覚や味覚に直接訴えかけるような意欲的な論集
絵画の豊饒な感性の領域を問題にした

尾崎彰宏

出佳奈子・新保淳乃・吉住磨子・
大野陽子・吉田明子 著
上村清雄 監修解説
石井朗 企画構成

▲味覚のイコノグラフィ

録盤・授乳・チョココレート
9・20刊 A5判288頁 本体4500円
ありな書房

絵画は宗教的な教義や情報という言語に還元できる意味内容を伝えるだけでなく、見る者の触覚や味覚に直接訴えかけるような豊饒な感性の領域がある。本書が問題としているのはまさにそうした感性の領域である。つまり絵画にあらわれた静物「手すり」が、鑑賞者に視覚を通して味覚を喚起することで、深い味わいを伝える機能をもっていることを明らかにしようとする意欲的な論集である。

第三章（新保淳乃）では、

イタリアのバロック絵画を代表するカラヴァッジョの七つの慈悲のおとしいが論じられる。それは、「マタイによる福音書」（第五章）で語られた土土の言葉に依拠した七つの慈悲の中で、とくに食べ物を与える善行に焦点を絞り、カラヴァッジョ作品の特質をあきらかにしている。この議論の流れを受けて、第三章（吉住磨子）では、写実的に描かれた「静物」の活用し新境地を開いたカラヴァッジョの静物画に話題がおよぶ。ただここで論じられた作品は、カラヴァッジョが奇が議論の分かれる静物画（論者は、カラヴァッジョ周辺の画家は馬鹿である。果物や野菜がふんだんに描かれた静物画を分析することで、この静物画には写実的な描写だけでなく、性的な感觸を伝えることに注目する。性的な視覚「ヌー」をこの時代に勃興してきた新しい静物画というジャンルをつかちて表現した特異な作品だという



わけである。「静物」の脱領域性を扱っている点において、さらなる研究の可能性を予感させる。

第四章（大野陽子）では、ミロ大司教を務め、慈寧宮動家でも知られるボツロネオの断食を描いた作品が扱われる。場所は意。書物に熱中するカルロの机の上には、断食中に食すパンと水が置かれているが、これらの静物は見る者に強い印象を与える。断食することは、彼の前方に置かれたキリストの磔刑像を視覚することで、キリストを「食」みずからの中に取りこむことの暗示になっている。肉体的な食を断つことが、逆に精神的な食をながすという逆説を明らかにしたところを自を開かれる。

これまでの章ではイタリア美術が中心であったが、第五章（吉田明子）では、一転して、1780年十八世紀の画家シヤルダンの『お茶を飲む婦人』が論じられている。テーブルの上に火けた砂糖を混ぜているところだ。一見なんの要もない光景だが、この中に論者は、茶を飲むという習慣が新しい個人の誕生を待たるといふ一見すると楽天的なもののような話へと読者を導く。それまで娯楽としての飲み物として主流を占めたアルコールは「さしきまられた」といった文化人類学的な贈与の名義があったが、茶は独りて楽しむという側面が強

い。結果として、茶のような嗜好品を通して味わいそのものを楽しむという趣向が生まれたことが絵画化された。いわば味覚を通して匿名の個人の登場が垣見られ、もともとなり、近代世界へとつながっていく。この現象は「公衆の誕生」や「文学の出現」の過程とも重なるところがあり、きわめて興味深い。

本書で論じられる様々な「静物」モチーフは、すぐれた描写によって見る者の感興を誘い、絵の大きさは魅力となっている。しかし、図像学的な観点からは、かならずしも重要なアクターではなく、その役割は軽視されがちであった。だが、そうした見る者の感性に訴える要素を絵の中にあらはめることで、個々の鑑賞者が楽しみとして絵を見ることができるようになり、そのことが絵の鑑賞という幅を拡げ、ひいては、「個人の誕生」という近代を準備することになったのである。その意味で本書は、近代の個人が成立に絵画がいかに重要な役割をばたし、それがどうして可能であったかを美術作品によって明らかにする野心的な試みと書えるだろう。

本書は、「知識のイコノグラフィ」に続いて、同じく鑑賞と解説を担当された上村清雄の『感覚のイコノグラフィ』シリーズの第二巻である。続刊の「味覚」に関する論考も楽しみにである。

（東北大学文学部教授）